

1面から続く

「付加価値ある旅行」

東京・銀座の大手百貨店、松屋銀座本店2階のラグジュアリーフロアは、平日の午後でも、閑散とする他の階とは対照的だ。海外高級ブランド店が並ぶ高級感漂うフロアでは、数十万円単位の衣料や雑貨を購入し、高級ブランドのロゴマークのついた大きな袋を抱えた顧客が目立つ。同フロアは今年9月の完成

ラストチャンス

を目標して拡張中だが、昨年12月後半から客足が伸び、百貨店不況の中にあつて、2、3月の売上高が前年同期比約10%も増えた。高級感とこだわり感を打ち出した海外バック旅行の人気も高い。小売業界と同様、円安は海外旅行には逆風だが、高額ツアーの販売は堅調だ。全日本空輸が昨年12月に発売を始めた「ANAワンダーアース」は、4月以降の旅行予約の売上高が想定定の20%以上。1番人気は米アラスカで

先高感から高額品盛況

オーロラや野生動物を見る8月末出発の11日間のツアーで、約80万円の高額商品にもかかわらず発売直後に完売し、追加設定分も売り切れてキャンセル待ちの状況だ。担当者「付加価値のある旅行への潜在需要が表面化した」と話す。

都内の物件「品薄も」

不動産投資セミナーも盛況で、「ダブル経済前夜」の様相だ。マンション販売・賃貸管理大手の日本財託グループが3月2日、東京・新宿で開いたセミナーには、昨年同時期よりも2割程度多い約120人が参加。投資相談の件数も、昨年の1カ月約40件から90件ほどに急増している。セミナーに参加した都内の女性(40)は「不動産は怖いというイメージがなくなった」と話し、物件購入を前向きに検討するという。

人気は東京都23区の800万円〜1500万円の中古ワンルームマンション。中古物件は価格変動が少なくて投資対象にしやすい、自己資金百数十万円、銀行借り入れ1千万円前後で計画する人が多い。株高で土地の値上がりを見込み、都内の物件には「品薄感が出てきた」(担当者)。

セミナー参加者の半数は40〜50代、全体の4分の1が女性で、同社は「40代以上の働く独身女性を中心に有望な投資マーケットとなっていく」と期待する。

消費の二極化傾向はさらに強まると予測する日本総研の小方尚子主任研究員は「景気浮揚への期待が心理面で個人消費を押し上げ、先高感から高級品市場を盛り上げていく」とする一方、「賃金引き上げが限定的で、日常の支出には冷静で節約の手を緩める気配はない」とし、本質的なデフレ脱却には時間がかかる」と分析する。